



**戦隊ヒーロー
完全墮落計画**

グリーン編

目次

●母体適合プログラム【機械姦/二穴/乳首責/連続 絶頂/拘束】	3
■蜘蛛の巣.....	17
○繋がれた検体【拘束/クスコ/痒み責】※途中ま で.....	32

※サンプル版です。

●挿入あり ○挿入なし ■性描写なし

機械姦、触手、デイルドの【挿入】も含みます。

●母体適合プログラム【機械姦/二穴/乳首責/連続絶頂/拘束】

再び意識が覚醒した時、碧は己の置かれた状況に息を飲んだ。

視界のすべてを削ぎ落としたような、極限まで無機質な空間。

正面を塞ぐ壁も、継ぎ目の見当たらない天井も、すべてが青白い人工光に均一に照らし出されている。

影を作る遮蔽物は一切存在せず、光源のありかさ定かではない。

その異様な空間の中央で、碧は斜め 45 度に傾いた金属製の実験台に、仰向けに固定されていた。

両足は太ももから開脚スタンドのアームによって M 字に大きく押し開かれ、頭部、首、両手首、足首までもが金属のリングによって拘束され、指一本動かすことすら叶わない。

「なっ……な、んだこれ……っ」

(動かない……！？)

目の前に突如、巨大なモニターが青白く発光して浮かび上がった。

そこに映し出されたのは、広げられた自分の股間のアップと、体内の、作り変えられた蜜孔と後孔の断面図、そしてリアルタイムで脈打つバイタルデータだった。

『目覚めたようだね、神楽木碧くん』

怪人研究者ウトガルザの声が、実験台に固定された碧の頭上から響く。

自分の股間が全開で晒されている惨状を目の前に突きつけられ、碧は顔を青ざめた。

「っ、やめろ……ッ！もう……十分だろうッ！？これ以上……僕の身体に……何をする気だッ……！」

『何を、かね？決まっているだろう。君のひ弱な子宮を補強し、私の種を受け入れる器へと作り替えるための適切な処置だよ。……なに、そう怯えることはない。この生体プラントが君のバイタルを計測しながら、段階的に適合濃度を上げた模擬因子を自動で注ぎ込んでくれる。……そう、君が死なずに私の子を産める、立派な母体になるまでね』

ウトガルザが愉しげに告げた直後、ウィーーン……カチリ、と足元の床から重く低いモーター音が響いた。

「ひいっ……！？」

モニターの映像と同時に、足元から光沢を放つ機械アーム群と、シリンダー状の機械杭が迫り上がってきた。

両方の乳首には小さな回転ブラシがカチリと嵌め込まれ、高速回転を始める。

さわっ、さわさわっ……♡ごしゅ、ごしゅ、ごしゅっ！♡♡♡

「ひゃあッ……！？♡や、……やめ……ッ！♡♡」

意思を持たない生体プラントの器具が、プログラムされた無機質な動作で、作業的に碧の身体へ一斉に襲いかかった。

無数の機械パーツとノズルが、露出した全身の性感帯を同時に捏ね回す。

カチリ、と微細な機械音が響き、乳首を捉えるアームの先端ユニットが瞬時に切り替わった。

皮膚を掠めるような高速回転から一転、今度は硬質なアタッチメントが突起を強力に挟み込むと、そのまま強圧で押し潰し、

グリグリと強くねじり上げられた。

淫芽には、シリコン製の回転ローラーが押し当てられ、規則的な作動音と共に執拗にコリコリと擦り潰される。

ぐにっ、ぐにっ♡くりくりくりくりっ♡じじじじっ♡コリコリ
コリッ♡

「ひゃあッ！？♡そこ、だめえ……っ！いじらないで、ン、
あぁッ！♡♡」

顔を歪めて悲鳴を上げる碧の口元から、ぽたぽたと唾液が垂れる。

そして機械オイルの匂いと共に、硬質な作動音が足元から同時に二つ響く。

ウィーーン……ガチリッ！ぐじゅっっ！♡ズグウウウウ
ッ！ッ♡♡♡♡

「あぐっ……！？♡♡ひ、あぁぁー……ッ！！♡♡♡」

（あがっ…！おしりまで……やだぁぁあっ……っ！）

蜜孔と、後孔、二つの肉孔に、自動注精プラントの機械杭が同時に根元まで突き立てられた。

前後の孔を同時に押し広げられ、目の前のモニターの断面図には、前に挿入された太い機械杭が子宮口の粘膜を強圧で激しく擦り上げ、同時に後孔へと侵入したもう一本の金属シリンダーが、腸壁のうねりをゴリゴリと力任せに圧迫しながら碧の内部を挟み撃ちにする凄惨な光景が生々しく可視化されていた。

ぐりゅんっ！ぐりゅんっっ！♡スチッ、ズチッ、スチュッ！ズチュッ！♡パンパンパンパンッ！！♡♡♡

ずちずちずちずちずちずちっ！♡♡♡ぐちゅっ、ズチィッ！ぐちゅっ、ズチィッ！♡♡♡

「や、あっ……！♡あッ、あッ……ッ！♡♡あぐっ……ひあっ……あ、ああ……ッ♡ッダメ、ダメえっ！♡♡」

ずちずちずちっ！ぐちゅぐちゅぐちゅっ！ズツチュ、ズツチュ、ズツチュ！♡♡♡パンッパンッパンッ！♡♡♡

「ひぐううゝっ、ひやめえっっ……！♡ッあゝン♡ああうっ……！♡♡」

『君のバイタルは実に良好だ。ほら、模擬因子が注ぎ込まれるぞ』

一定のテンポで刻まれるピストンの駆動音が実験室に響き渡り、前後同時にドクン！と模擬因子の塊が注入された。

ドビュッツツツツツ！♡ドブンツ、ごぼっっ……♡♡♡

「っあ♡ ああ♡ あ、がぁ、あ♡ ツ……！♡出さないでえっ……！お腹……熱いよおッ……！♡♡♡」

はくはくと熱いと息を吐き出し、未だ胎の奥に注がれ続ける熱にゾクゾクと身を震わせる。

ずるううう……♡ズチュッ……スポンツ！♡♡ごぼっ………♡♡♡ごぶっっ……♡♡♡

「ひ、ぐっ……うう……♡」

（と……止まった……？）

前後の孔から機械杭が一度引き抜かれ、水音が響く。

動作が止まったことに、碧は激しい過呼吸のなかで一瞬だけホッと安堵の息を漏らした。だが、それも束の間。

ぐっ……、ぐぶっっ……♡ぶちゅんっ！♡♡

「あぐっ？！♡」

『気長にじっくりと慣らしていこうじゃないか。安心したまえ、君のことは絶対に死なせないさ。何としても私の子を宿せる立派な母体にしてあげるからね』

注ぎ込まれた粘液が溢れ出てしまわないよう、間髪入れずに次の工程を担当する新たな機械シリンダーが勢いよく突き立てられた。

「ひゃあああああ！♡いやあっ……いやだああッ……！♡離してえッ！もう……なにも、入れないでえッ……！♡♡」

碧の悲痛な声など、眼前のシステムが認識できるはずもない。

新たに入り込んだ無機質な杭は、寸分の狂いもなく機械的なストロークで、体内を容赦なく掻き混ぜ始める。

ズチュ、ズチュッ！♡ズチッ、ズチッ、ズチッ♡パンッ、パンッ、パンッ！♡♡♡

「あ、あゝ、はっ……！♡またっ……あゝ♡入って……お腹、いっぱい……っ！まえも、後ろも……、ンああゝ あッ！♡♡♡」

『どうだね。この自動プラントは君のバイタルと粘膜の反応をリアルタイムで解析し、プログラムを瞬時に最適化している。照準も完璧だろう。君の悦いところを的確に突いてくれるはずだ』

両方のピンと勃った乳首には、ノズルが強力な吸引力で吸い付き、細かく高速で機械振動を始めた。

同時に、前後の孔を交互に穿つ無機質なシリンダーが、下半身を激しく揺さぶる。

じゅるっじゅるっ♡♡ブイイイイイイイイン♡♡♡

「ヒあぁッ……ッ、あッ……！♡♡んあぁッ、ひぐうっ……ッあ、あッ！♡♡♡」

それだけにとどまらず、肥大化した淫芽へと先端から感作液を垂らす回転ローラーが、グリグリと円を描くように強圧で押し擦りつけられた。

上半身と下半身、そして前後の孔、全身の性感帯を同時に、かつ別々の無機質なリズムで叩き潰される狂乱の快楽。

碧の脳はキャパシティを超え、再び強制絶頂の波へと呑み込まれていく。

「イあッ、ああッ！♡♡♡ッあ、イツ……イぐ、イグうゝ うゝ うッ♡♡♡ひああゝ ああッ！♡♡」

ビクッ♡ビクンッ♡♡♡ドクッ、ドクッ！♡♡

「んあッ、あッ……ッ！♡♡あぐっ……あゝ っ……あゝ、ああゝ ……ッ♡またっ……なか……、でてるう……♡」

二つの孔から同時に注ぎ込まれる自動プラントの種付けに、碧の子宮と腸が激しい圧迫感で膨らみ上がる様子が、目の前の断面図モニターにハッキリと映し出される。

ちゅぽっ♡ごちゅッ！ズチッ！♡ズパンッ！♡ズチュッ！ズチュッ！ズチュッ！ズチュッ！♡♡♡

くにくにくにくにっ♡♡ビイイイイイイイイイ♡♡♡

「あッ！♡あゝ、あ、ダメえゝ ……ッ！♡♡やあッ、ひぐッ… …イツでるっっ……、イってるからあああ♡あゝ ぎいい♡♡♡♡♡」

びくっ、びくっ、びくっ、びくっ♡

目の前が真っ白に点滅する。ふー——……♡ふー——……♡と呼吸を整えようとしても、プログラムされた機械はそれすら待ってくれない。

ヴィィィィィ！！！！グイングイングイングインッ！！

♡♡♡

「いやぁ` あ` あ` あ` ……やめ` てえ、とまっでええ` えっ、ひ、ひっ、んぎィ` ィ` ィ` イィィっ……♡♡♡」

前後の孔が交互に奥深く叩かれるたび、淫芽を押し潰す機械ローラーが駆動音を立てて蠢き、乳首に取り付いたノズルが限界まで皮膚を引き絞っていく。

キュリキュリキュリッ！ギョルルルッ！ぐぐっ♡ぎゅうううう♡ごちゅごちゅごちゅごちゅ！♡ズチュッ！ズチュッ！ズチュッ！♡♡♡

「ィっ……ィぐううっ……！♡♡♡ッあ、ああああっ！♡うあ` あ` あ` あ` あ` ツ……ッああ` あ` ああッ！♡♡♡」

前後二つの肉孔の最奥、子宮口と腸奥へ、同時に大量の模擬因子が脈打つ音とともに勢いよく吐き出される。

ドプッッッッ！♡ゴブゴブゴブゴブっ！♡♡♡

「ッあ、あゝ、あゝ、あゝ、ああああッ……！♡♡あ、あゝ、あゝ、あついのぉ……入って、くるぅ うッ……！♡♡♡」

二か所同時に体内を満たしていく模擬因子の圧倒的な熱量と重圧感に、碧は大きく喉を反らせ、絶頂を迎えた。

だが、絶頂の余韻に浸る猶予すら与えられない。

体液を撒き散らしながら過呼吸を起こす碧の下半身へ、間髪入れずに自動プラントのプログラムが作動し、次なる機械アームが迫る。

「ひ、あッ……ああゝッ……！♡♡待って……休ませてっ！もう入らない……っ、許して……許してえッ……！♡♡」

絶頂で収縮しきった二つの孔へ、まだ先端が抜け切る間もなく、次なる極太の金属シリンダーがぐいぐいと肉壁を割り開いて押し込まれていく。

ずちゅっ！ゴチュウッ！ドスッ！ドスッ！ズチッ！♡♡♡

「ッひあああッ！？♡♡ダメっ、ま……っ！♡♡お腹ッ、こわれッ、ひあッ……あゝ あああッ……！♡♡♡」

パンパンに膨らんだ子宮と腸内を、機械杭がくり返し捏ね繰り返す。

押し出された大量の模擬因子と愛液が二孔の隙間からぶちゅぶちゅと下品な音を立てて勢いよく溢れ出る。

「ッあ、あああッ！♡♡♡ッあっ……！♡♡ひぐっ……！♡ッあゝ あゝ あゝ あゝ ああッ！♡♡♡」

新しく突き立てられた二本の機械杭は、寸分の狂いもない一定のテンポで旋回を始めた。

前孔の杭は、先ほど注ぎ込まれた粘液を奥へと押し潰しながら、子宮口の表面をぐりゅんっぐりゅんっ♡と円を描くように捏ね回す。

一方、後孔の杭は腸壁の最も敏感な突起を押し潰し、内部に溜まった熱い液を掻き混ぜながら壁面を抉り上げた。

前を抉られれば、後ろの粘膜が引き攣れる。後ろを抉られれば、子宮の奥までその振動が直接響き渡る。

交互に、そして規則正しく体内を磨り潰される感覚に、碧の腰は拘束台の上で絶え間なく跳ね上がった。

直前に注がれた模擬因子が、機械杭によって子宮口の奥深くへ、粘膜のひだの隙間へと強制的に押し塗られていく。

(ダメえ……っ！もう……っ、なにも……考えられな……
い……♡♡)

絶え間なく粘膜の最奥を集中的に挟り回される執拗な刺激によって、碧の脳の限界は超えていた。

目の前のモニターでは、混ざり合った体液で泡立つ体内断面図と、激しく点滅するバイタル警告灯が残酷に異常事態を告げている。

『素晴らしい……浸透率、子宮の適合性ともに想定以上の数値だ。拒絶反応を示していた君の体が、順調に私の因子を受け入れ易く変質してきているぞ……！』

頭上から降ってくるウトガルザの歓喜に満ちた声すら、今の碧には遠い水底の泡音のようにしか届かない。

『……さあ、次のステップへ移行しよう。君の体が私の因子を拒絶しなくなるまで、念入りに仕込んであげよう』

機械の規則的な駆動音と、自身の胎内を掻き回すおぞましい水音を聞きながら。

碧の瞳からすうっと光が失われ、溢れ出る体液の温もりと絶頂の残響を残したまま、その意識は深い闇の中へと沈んでいった。

■蜘蛛の巣

ダクトを滑り落ちて顔面を強く打ちつけた痛みが、激しく痺れるように残っていた。

地面に叩きつけられたアセット専用の視力補助デバイスはフレームが歪み、レンズに蜘蛛の巣状の亀裂が走っている。

顔に掛け直したものの、ヒビ割れたレンズ越しの世界は白く滲んでいる。

ぼやけた視界の中で、碧は慎重に周囲へ神経を研ぎ澄ます。

漂ってくるのは、カビ臭さと薬品が混ざり合ったような、つんと鼻をつく匂い。

足元の地面は、土でもなければコンクリートなどの硬い床でもない。どろりと粘つき、靴底を吸い寄せるような不気味な感触だった。

壁を頼りに立ち上がり、手袋越しにその表面へ触れる。

(……なんだ、これ……?)

壁の奥から、かすかな温もりとドクン……ドクン……という不規則な脈動が手のひらに伝わってくる。

まるで生き物の胎内にでも迷い込んでしまったかのような、生理的な嫌悪感を煽る感触だった。

(……気味が悪い……。それにしても、真っ暗で何も見えないな……)

立ちすくんでいても状況は悪化するだけだ。

碧は震える手で胸ポケットから小型の通信機器を取り出し、先ずは陽への回線を開いた。

ノイズすら上がらない。画面には無情にも『圏外』の文字が点滅している。通信の届かない基地の深部に落ちたのか、あるいは端末そのものが破壊されたのか。

焦る指先で、次は春馬のアドレスへとアクセスを切り替えた。

(繋がってくれ……！)

数秒の息苦しい静寂の後、ザザッという微弱な接続音が耳元で響いた。

『碧……っ！？無事……っ』

「春馬くん！今どこにっ……」

『――っ、来るな！碧、そこから』

ブツンッ。

警告を叫ぶ途中で、唐突に通信が途絶えた。

画面を一瞬激しいノイズが覆い、直後に『SIGNALLOST（通信切断）』という無機質な文字だけが虚しく表示される。

碧は爪が皮膚に食い込むほど拳を強く握りしめた。

（っ……春馬くん……！早く助けに行かないと……！）

碧は一瞬だけ目を閉じ、深く息を吐き出して焦る心を強制的に押し殺した。

（落ち着け……パニックになるな。一瞬でも回線が生きているなら、ログは残っているはずだ）

端末を操作し、通信が切れる直前に残されたわずかなデータ履歴を読み解析する。

画面に走る意味不明な数字の羅列から、春馬の端末が発していたかすかな電波の痕跡を必死に拾い上げた。

（この階層のさらに奥……ここから西側か）

敵の妨害のせいで詳細なマップまでは表示されない。

だが、目指すべき方向は分かった。

手袋越しに脈動する壁を伝いながら、割り出した位置情報を頼りに、配管の入り組んだ通路を突き進む。

ヒビ割れたレンズ越しに見える世界は白く歪み、距離感すらおぼつかない。

それでも、春馬のもとへ急がなければという焦りが、碧の脚を動かしていた。

（この先だ……。どこかに、春馬くんが……）

通路の突き当たりに差し掛かったとき、壁面に設置された異質なパネルが碧の目に留まった。

周囲の生体壁とは異なり、そこだけが無機質な金属フレームで覆われた、施設内のシステム端末。

画面には黒の背景色に緑色のアクセスコードが明滅している。

碧は足を止め、思考を巡らせた。

(……ローカルのメンテナンス用ポート……？敵の施設内とはいえ、端末が存在するなら……僕の端末を直結させて、内部マップとセキュリティをハックできるかもしれない)

ぼやけた視界で闇雲に進むより、敵のメイン回線に侵入して詳細なマップと春馬の正確な位置と状態を把握する方が確実だ。

「……やってみる価値はある……！」

胸ポケットからデータ接続用のコードを取り出し、端末のポートへと手際よく差し込む。

端末に表示された入力パネルへ手を伸ばし、キーを叩く碧の指先が高速で踊ると、画面上に無数のコマンドラインが走り抜けた。

持ち前のハッキング技術が、瞬く間に施設の第1プロテクトを突破していく。

(いける……！内部プロテクトの解読率、40%……60%……80%……！)

手応えはあった。セキュリティを突破し、春馬の現在地と安全なルートが画面に展開される。そう確信した次の瞬間。

『――Access Granted……ふふ、実に素晴らしい手際だね』

突如、画面上の英数字がぐにゃりと歪み、嘲笑うような音声波形データへと書き換わった。

碧の背筋に、氷を突きつけられたような悪寒が走る。

（ハッキングプロテクトが……偽装されていた……！？）

「くっ……」

罨だと気づき、コードを叩き抜こうとした時には、すでに遅かった。

端末の排気口、そして碧が立つ周囲の壁の隙間から、無色無臭の液体ガスが、けたたましい噴射音とともに一斉に吐き出されたのだ。

「がッ……っ……けほっ、……！」

（い……意識が……春馬くんっ……陽、くん……）

速やかに息を止めようとしたものの、ガスは皮膚や粘膜からも急速に体内へ侵入してくる。

視界を奪われ、焦りに満ちていた碧の思考力は、ガスによって瞬時に濁り、麻痺していった。

膝から崩れ落ち、粘ついた生体床に手をつき、指先から急速に感覚が失われ、倒れ込む。

ぼやける意識の底で、端末のモニターが青白く光り、滑らかな合成音声が耳元でささやいた。

『君が来てくれるのを、ずっと待っていたんだよ、神楽木碧くん』

暗転していく視界の中で、碧は自分が敵の仕掛けた籠の中に、自ら進んで飛び込んでしまった事実を悟りながら、意識を失った。



神楽木碧という人間の人格は、極端なまでの抑圧と、わずかな逃避の隙間で形成されていた。

かつて、幼い頃の記憶の中にある両親は、それなりに仲の良い夫婦だった。

しかし、元キャリアウーマンとして第一線で働いていた母親が、碧を出産すると同時に職場から去り、すべてを我が子に捧げると決めた瞬間から、家庭は狂い始めた。

自らのキャリアを投げ打って産んだ一人息子を、何としても一流の道へと進ませたい。

その情熱はいつしか異常なまでの執着へと変わり、苛烈な教育と躰となって碧に襲いかかった。

「碧、あなたはお父さんみたいにはならないでね！」

「私がこんなにあなたのためを思ってやってあげているのに、どうして出来ないの！？」

栄養バランスを完璧に計算された味の薄い食事。

分刻みで管理されるスケジュール。

責め立てる母親の金切り声に、根が優しく生真面目な碧は

「お母さんも僕の将来を考えてくれているんだから」

と自分に言い聞かせ、反論することも邪見にすることもできずに息を潜めて耐え続けた。

だが、その過剰な教育方針は、当然のように夫婦間にも亀裂を生んだ。

家庭内で絶え間なく繰り返されるヒステリックな詰問とピリついた空気。

妻の度を越した厳しさに嫌気がさした父親は、仕事のストレスも重なって次第に家庭に居場所を失い、逃げるように別の女性へと身を寄せてしまったのだ。

ある日を境に、父親は家から出て行った。

喧嘩が増えて冷え切っていた食卓から、いつの間にか父親の食器が消え、クローゼットから服がなくなっていた。

幼い頃の碧には、大人の事情など分かるはずもない。

「お父さんはどこへ行ったの？」と尋ねても、母親は不機嫌になり「あの人は私たちを裏切って、別の女のところへ行ったのよ」と吐き捨てるだけだった。

『裏切り』という言葉の重さも、『浮気』という意味も、当時の碧には理解できなかった。

ただ、お父さんには、お母さんや僕よりも大切な人ができて、捨てられた。

ということだけが、幼い心に冷たく突き刺さっていた。

母親は父への怨嗟を碧に連日言い聞かせた。

碧は母親の機嫌を損ねないように、必死に「お父さんなんて嫌い」と言い続けてきた。

だからこそ、街角で再会した父親に「少し話さないか」と言われた時、拒絶よりも先に、胸の奥で眠っていた「お父さんに逢いたかった」という素直な感情と、母親に対する激しい罪悪感が同時に芽生えて混乱したのだ。

碧にとって、かつての父親は唯一の救いであり、優しい存在だった。

母親の苛烈なまでの完璧主義と過剰な期待に息が詰まりそうになった時、陰でそっと助け船を出してくれたのはいつも父親だったのだ。

ずっと背が高く、細身の仕立て良いスーツを着こなす姿。

黒縁メガネの奥にある目元はどこか厳格そうに見えるが、碧に向ける声と言葉遣いはいつだって優しく穏やかだった。

「――碧、大丈夫かい？」

声をかけてきた父親の顔は、けれど記憶の中にある姿よりも幾分やつれ、いつも綺麗に剃られていた顎にはうっすらと青髭が残っていた。離婚の心労とが伺え、碧の胸を締め付けた。

碧の自宅から少し離れた場所へ、父親の車に乗り込んで、車内に流れるぎこちない空気の中で、「最近、どうだ？」「……普通だよ」と短い会話を交わしながら辿り着いたのは、レトロな雰囲気の小さな喫茶店だった。

カウンターには初老の男性が立っていて、コーヒーの芳醇な香りが店内に漂っていた。

ボックス席に向かい合って座ると、メニュー表を差し出される。

「好きなもの、何でも頼んでいいぞ」

父親の優しい眼差しに胸が締め付けられながらも、碧はメニューの甘味欄に目を落とし、小さく首を振った。

「ううん。お母さんが、甘いものは体に悪いから駄目だって」

「……あいつは。相変わらずなんだな」

父親は苦笑交じりに小さく呟き、深く息を吐き出した。

碧の母親は、元キャリアウーマンで意識の高い人だった。

出産を機に職場からの退職を余儀なくされた彼女は、自らのキャリアを捨てて一人息子に狂乱的な期待を寄せるようになった。

かつて碧が幼い頃に口にした「僕、お母さんみたいになりたい！」という一言が、母親の暴走に拍車をかけた。

常軌を逸した英才教育、生活のすべてを監視される徹底的な管理。

父親もまた、その苛烈さに追い詰められた一人だった。

仕事で大きな壁にぶつかり悩んでいた時期、求めたのは妻の温かな寄り添いだったが、完璧主義の母親が返したのは

「もっと努力できるはず」「あなたの甘えよ」という叱咤だった。

家にも職場にも居場所を失った父親は、やがて優しく受け止めてくれる別の女性へと逃げ、浮気に走ったのだった。

父親の裏切りを知った母親の歪みは、離婚を経てさらに加速し、一人残された碧への執着へとすべて注ぎ込まれることになった。

「少しくらいならいいだろう？ほら、このケーキなんか美味そうだぞ。そうだ、お父さんと半分こしよう」

父親のその一言に押し切られるようにして、

碧は小さな口でショートケーキをかじり、緑色に輝くソーダをストローで吸い上げた。

舌の上に広がる甘さと、シュワシュワと弾ける炭酸の刺激。

「体に悪いから」「糖質は頭を鈍らせる」と母親から徹底的に遠ざけられていた禁断の味。

母親の目を盗んで過ごすわずか小一時間の秘密は、幼い碧にとって生まれて初めて味わう背徳の自由そのものだった。

やがて父親の賃貸マンションへ通うようになった碧にとって、そこは息の詰まる家から切り離された唯一の聖域となった。

週に一度、母親に決められた塾や習い事の隙間時間を巧みに縫っては、父親の部屋へと足を運ぶ。

父親は自作のデスクトップPCの前に碧を座らせ、キーボードの打ち方からシステムの仕組みまで、まるで男同士の秘密の遊びのように丁寧に教え込んでくれた。

「いいか碧、コンピューターの世界にはな、どんなに頑丈な壁でも、必ず抜け道が存在するんだ。仕組みさえ理解すれば、どんな鍵だって開けられる」

黒い画面の上を緑色の文字列が軽快に流れていく。

母親の支配下で、生きることすら監視されていた碧にとって、キーボードを通じて広がるデジタル空間だけが、誰の目も届かない広大な自由だった。

苛烈な母親の教育に擦り減らされる日々の中で、キーボードを叩くカチャカチャという乾いた音と、モニターの青白い光に包まれるその束の間の時間だけが、碧が唯一、自分自身を取り戻せる、息継ぎの場所だったのだ。

○繋がれた検体【拘束/クスコ/痒み責】※途中まで

真っ先に感じたのは、皮膚を焼くような全身の異様な熱さと、網膜を直撃する白いライトの眩しさだった。

「……っう……あ……」

声を上げようにも喉が激しく乾き、掠れた吐息しか漏れない。

身を振ろうとしたが、両手首、両足首、そして胸元と腰回りまでが頑丈な金属拘束具で締め付けられ身動きすら取れない。

視界は白くぼやけ、焦点が合わない。

その眩しい光の輪の中に、ひょろりと背の高い白くて異質な影がぬっと割り込んできた。

纏っているのは、科学者を模したかのような白衣。その上から覗く頭部は生き物の肉感を剥ぎ取ったかのように削げ落ち、まるで剥き出しの骸骨そのものだ。

落ち窪んだ眼腔の奥で、怪光が浮かんでいる。

「おはよう。麻酔がよく効いているみたいで何よりだ。はじめまして、私はウトガルザ、ギガ・ネビュラの科学者さ」

異形の白い物体が、滑らかでどこか楽しげな声を響かせる。

「君のような素晴らしい現役アセットが、私専用の検体として宛がわれるなんて光栄だよ。さあ、神楽木碧くん……君のその優秀な身体を隅々まで、じっくりと調べさせてもらおうからね」

ぼやける視界を必死に動かすと、彼の周囲にはいくつもの黒い物体が浮遊し、小声で何かを囁き合っていた。

バイタルがどうの、変異薬の反応がどうの、人間ではない何かであるはずなのに、なぜか言葉の意味だけが嫌にハッキリと脳へ届いてしまう。

ふと肌を撫でる冷気に気づき、碧は己の異変に凍りついた。

戦隊の強化スーツは剥ぎ取られ、いまや身につけている衣服はない。全裸のまま、実験台の上に晒されているのだ。

「さあ、より正確なデータを取るために、姿勢を変えようか」

ウトガルザが手元のコンソールを操作すると、ウィーンという無機質な機械音とともに実験台が変形を始めた。

拘束された両脚が力づくで左右へと大きく割り開かれ、膝が折り曲げられる。

「っあ、や…………っ！」

抗う間もなく、碧の最も恥ずべき箇所が強烈な白いライトの真下で晒される、屈辱的な姿勢で固定された。

「ふむ、変異葉の定着率は極めて良好だね。膣口の形成も何ら問題なく完了している」

ウトガルザは感情の読めない白い顔を碧の股間へ近づけると、両手にはめた医療用グローブで、新しく作られた生体組織の割れ目をちゅぷりと音を立てて開いた。湿った粘膜を検分するように指先で撫で回す。

「い…………っ！くあ…………っ！」

「うん、実に美しい出来栄えだ。粘膜の分泌量も正常だし……ふふ、見てごらん、クリトリスに該当する感応器官もちゃあんと機能しているよ。内部の開拓と拡張は、これからじっくり進めていくとしようか」

「っ、う…………っ…………？」

麻酔の影響で痺れ切っていた思考の隙間に、恐ろしい言葉が滑り込んでくる。

それと同時に、薬効が徐々に薄れ始めていた。

身体の感覚が段階的に戻るにつれて、両脚を割開かれている体勢の負担や、股間に触れられる異物感が、吐き気を覚えるほど鮮明な輪郭を持って碧の脳へと伝わってくる。

碧は重い瞼を必死に持ち上げ、濁った視界で恐る恐る己の下腹部へと視線を落とした。

白くぼやけた視界。それでも、男性としての象徴が消え失せ、平坦な下腹部に変えられていることだけは、理解できた。

「っ、あ……！あ……っ、あ……っ！？」

己の身体に起きた凄惨な改変に、碧の脳内は激しいショックで埋め尽くされた。

麻酔の麻痺から回復しつつある喉を必死に震わせるが、声帯は上手く噛み合わず、かすれた吐息と呻き声しか漏れ出てくれない。

叫ぶことすら許されないまま、碧は涙でぼやける視界の中で、自らが男から雌へと都合よく作り変えられてしまった絶望的な現実を突きつけられていた。

しかし、碧が絶句している間にも、ウトガルザの実験は淡々と進行していく。

「では、受容深度の計測に移ろうか」

ウトガルザがそう呟くと、彼の周囲をふよふよと漂っていた黒い物体たちが動き出した。

浮遊する黒い胴体から何本もの細い金属触手が伸び、トレイに並べられた実験器具の中から、鈍色を放つ金属製のクスコと、目盛りとセンサーが精密に刻まれた透明の医療用シリンダーをうやうやしく捧げ持つ。

『生体反応、麻酔の減衰を確認、感度レベル、上昇中』

歪んだ小声でデータを取り交わす助手から器具を受け取ると、ウトガルザは麻酔が切れかかって感覚を取り戻しつつある碧の、固く閉じられた蜜孔へとまずはクスコの先端をねじ込んだ。

「っひ、うっ……！ あ……ぐうう……ッ！」

(ひっ……！？固いのが……入って……っ)

ネジが回される金属音とともに、くちばし状の金属弁が碧の肉壁を押し広げていく。

ギシギシと肉を開帳され、内壁の粘膜が空気に晒されて引き攣った。

開かれっぱなしに固定された蜜孔の隙間へ、ウトガルザは躊躇なく目盛り付きの透明シリンダーを押し込んだ。

ぐじゅっ……、ぐっ、ぐっ

「うゝ……っ、ぐっ……、あが——……ッ！」

「うん、バイタルは安定しているね。助手くん、内壁の圧力データを記録しておきなさい」

『圧力値、規定値をオーバー。拡張余地、極めて良好』

ミシミシと奥へ侵入してくる異物感がダイレクトに脳を刺す。

薄れゆく麻酔の影響で痛覚はより一層研ぎ澄まされ、碧は体を激しく痙攣させて背を反らせた。

助手たちの細い触手が碧の腕や足にピタリと張り付き、脳波や脈拍のデータを機械的に吸い上げていく。

碧の絶叫や痙攣など意にも留めず、ウトガルザは助手から提示されたモニターの数値を淡々と読み上げた。

「なるほど……大和悠緋くんは戦闘型特有の強力な括約筋と柔軟性を持っていたが、君は未成熟で内壁がとても固いね。だが受容深度は十分だ。これなら子宮を私の種に馴染ませるには何の問題もない」

引き裂かれるような侵入感の中で突きつけられたのは、自分が怪人の子種を受け入れる雌として、肉体も機能も開拓できるという不条理な事実だった。

そしてこの怪人は悠緋の名を述べた。

悠緋もこの実験室に連れてこられたということに他ならない。彼は、無事なのか、そう思案する間にも実験は続けられる。

「次は粘膜刺激に対する神経系の反応を見てみようか」

ウトガルザは弾んだ声でそう言うと、金属触手に持たせた大型の注入器を引き寄せた。

ガラス管の中で揺れるのは、妖しく粘性の高い琥珀色の液体だ。

先端のノズルが、シリンダーによって無理やり押し広げられた蜜孔の最奥、いまだ痛みに打ち震える粘膜の隙間へと差し込まれる。

「ひっ……！？や……え……っ」

「さあ、力を抜いて。君の脳が快樂と苦痛をどう処理するのか、データを見せておくれ」

ピストンの押し込まれる無機質な音が響き、ドロリとした濃密な液塊が直に体内へと注ぎ込まれた。

ぐちゅ……じゅううううー———！

「あゝっ……！？う、あゝ ああーっ！？」

注入が終わった直後、碧の全身の毛穴が跳ね上がるような錯覚に襲われた。

異物感は一瞬で消え去り、代わりに弾けたのは猛烈な熱だった。

まるで煮えたぎる油を直接子宮の底に注ぎ込まれたかのように、新しく作られたばかりの脆弱な粘膜が一気に沸騰する。

「あ、……が、っ……っ、あ……っ！？」

熱さだけではない。すぐさまそれを追うように、狂氣的なまでの痒みが体内から溢れ出してきた。

皮膚の表面ではなく、指の届かない肉壁の奥深くに何千何万の微小な虫が押し寄せ、一斉に蠢き回っているかのような、身を削るような粘膜の蠢動。

かき篋りたい、けれど手首は固く拘束具に固定されそれは叶わなかった。

（あそこが……あつくて……っ、痒い……っ！……なにを……っ、いれられた……っ！？）

「ふむ……心拍数も体温もぐんぐん跳ね上がっているね。粘膜細胞が活性化して、全身の受容器官がすっかり過敏になっているようだ」

『脳波パターン、顕著な興奮反応を示しています。感度、平常時の数百倍まで増幅』

助手たちの無機質な報告が碧の頭上を飛び交う。

だが、今の碧にはその声すらノイズにしか聞こえなかった。

下腹部を貫く苛烈な熱と痒みは、麻酔の残分を吹き飛ばし、

神経の端々を強制的に覚醒させていく。

作り替えられた蜜孔から次々と愛液が溢れ出し、尻を伝い、実験台に流れていく嫌な感触がした。

「あ……っ！うぐっ……、あ、あゝ ああっ……！」

「素晴らしい。身体はしっかりと『雌』としての役割を受け入れようとしている。君の理性がどれほど拒絶しようと、その肉体は精液を貪り喰うために作り変えられているのだからね」

ウトガルザの手袋をはめた指先が、今や熱を孕んで脈打つ淫芽へと触れた。ほんの僅か、皮膚が擦れただけの微小な刺激。

しかし、感度を極限まで増幅された碧の脳には、まるで電流が直接脳幹を焼きちぎったかのような甘い衝撃となって突き抜けた。

「あゝ あああッー！？ッ、あゝ ……っ、あ、あ……っ！！」

衝動に耐えかね、碧は台の上で全身を激しく跳ねさせ悶絶した。

だが、いくら身を振ろうとも手脚を縛る頑丈な金属がギリギリと皮膚を圧迫する。

あまりの快楽に視界が真っ白に染まり、碧は顎を逸らして絶叫した。

「いい反応だ、肉体が馴染むにつれて、君はもっと素直に私を求めるようになる。……さあ、次の段階へ入ろうか」

熱と痒みで意識が溶けていきそうな中で、碧は涙に濡れた瞳で天井の白いライトを見つめることしかできなかった。

内側から焼き尽くすような凶悪な痒みは絶え間なく碧の神経を責め立て、もはや男としての矜持も、戦士としての誇りも、人としての羞恥すらも一瞬で焼き払っていった。

「あ……っ、あ、う……っ！た、す……っ、かゆ、い……っ！
な、か……っ、いれて……っ、お願い……っ、あゝ あああっ！」

涙と汗でぐしょぐしょに濡れた顔を歪め、碧ははくはくと口を開閉させながら、なりふり構わず懇願した。

理性を引き裂く痒みに耐えかね、自ら「何かを入れてくれ」とすがりつく姿は、哀れな雌そのものだった。

「ふふ、かわいそうに。かゆくたまらないんだね。……よしよし、じゃあ、これで中を搔いてあげよう」

ウトガルザは愛おしむような声で囁くと、表面にいくつも突起物が刻まれた透明な実験用ディルドを手にとった。

粘膜活性薬でドロドロに溶け出た愛液を先端になすりつけると、そのまま狭い蜜孔の奥深くへと一気に突き立てた。

【続きは本文をお楽しみください】